

オプション教材キンモクセイ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1「あれ、まだ誰も起きていないのかな。」
 今日、お父さんとザリガニとりに行く約束をしています。だから、ぼくは早起きをしました。ぼくが起きたとき、お父さんはまだ寝ていたの、
 「早く起きなさい。遅刻しますよ。」
 と、いつものお母さんのせりふをまねて、お父さんを起こしました。
 2朝ごはんを食べているときも、頭の中は、ザリガニとりのことについてばかりでした。
 さあ、いよいよ出発です。ぼくが先頭に立って歩きました。ザリガニがいる川までは、歩いて二十分くらいかかります。太陽が照りつけ、汗がにじみ出てきます。3ぼくは、ずんずん歩きました。川には誰もいなかったの、早く来てよかったと思いました。
 お父さんは、
 「水がよどんでいるところにいるんだよ。」
 と言いな、ザリガニが潜んでいるような場所を探します。4
 お父さんは、大きな石がごろごろしているところを見つけると、大きな網で何度も川底をすくいました。でも、全然とれません。何度やっても、網には、ごみのようなものがくっついてくるだけです。
 5仕方がないので、場所を変えてみました。今度は、大きな水たまりのようところです。網ですくうと、ヘドロのようなものの中に何が動いています。ぼくは、思わず、
 「あ、いたいた。」
 と叫びました。小さなザリガニがピチピチと動いています。6元気のいいザリガニが何匹か網にかかっていたのです。ぼくもやってみたくなって、網でヘドロをすくってみました。思ったより重くて、網を引き上げるのが大変でしたが、網の中をよく見てみると、三匹

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ぐらいのザリガニが引つかかっていた。7ぼくは、うれしくなり
 ました。怒っているみたい、ハサミを振りかざしているザリガニも
 ました。ぼくは、ハサミに気をつけながらザリガニをバケツに入れ
 ました。
 そのあとも、お父さんと交代でザリガニとりを続け、たくさんザ
 リガニをつかまえることができました。8こんなにたくさんとれると
 は思っていなかったの、びっくりしました。
 「ザリガニは共食いをしてしまうから、少し減らした方がいいな。」
 とお父さんが言ったので、残念でしたが、半分くらい川に返しまし
 た。
 9帰りに、水そうとザリガニのえさを買い、家に帰ってか
 ら、ザリガニたちを水そうに移すと、少し驚いているようで、
 落ち着かない様子でした。ぼくは、ザリガニたちが早く慣れてくれる
 といいなあと心の中で思いました。0

（言葉の森長文作成委員会）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 「早く夜にならないかなあ。」
ぼくは、そうつぶやきました。

「また言ってる。これで何回目？」

お母さんは、おかしくてたまらないという顔をして笑いました。今日の夜は夏祭りなのです。ぼくは、カレンダーに赤のペンで丸をつけて楽しみにしていました。2 綿あめにかき氷、たこ焼きにチョコバナナなど、いろいろなものを食べられるのです。

ついに待ちに待った夜です。お母さんがくれた五百円をお財布に入れて、ぼくは校門に急ぎました。3 校門に着くと、コウジとユウキが待っていて、ぼくを見つけると、

「おう、早く行こうぜ。」

と僕をひっぱりました。たくさんのおうちがぶら下がっていて、いつもの校庭ではないみたいです。まるでおばあちゃんの家の近くの商店街みたいだなと思いました。

4 何を食べようかときよろきよろきしていると、ソースのこげるにおいが漂ってきました。ぼくたち三人は、

「いいにおいだなあ。焼きそば食べよう。」

と、鼻をクンクンさせながら列に並びました。ぼくとユウキが先に買って、コウジの順番になりました。5 コウジは、お店のおじさん

「いつばい入っているのをください。」

とお願したので、ぼくとユウキは、思わず顔を見合せて笑ってしまいました。コウジは、クラスの中でも食いしん坊で有名なのです。

6 おじさんは、重なった焼きそばの中からひとつひっぱりだして、「これはたくさん入ってるだろ。」

と言いました。ぼくは、うらやましいなあと心の中で思いまし

た。もしぼくがコウジだったら、あんなふうには大人にお願いできません。7 なんだか恥ずかしいからです。お母さんにもよく、ぼくは引つ込み思案だと言われているのです。

焼きそばは、家で食べるよりも味が濃くて、お祭りの焼きそばの味がしました。お母さんの作る焼きそばもおいしいけれど、ぼくはこういう焼きそばも好きです。8 多分、お父さんも屋台の焼きそばの方が好きだと思います。どうしてかという、濃い味が好きだからです。

そのあとは、カキ氷とチョコバナナを食べました。チョコバナナを買うときのことです。ぼくは、大きいのが食べたいなあと思いましたが、

9 ぼくは、思い切って、「ちよつと大きめのをください。」

と言ってみました。胸がドキドキしました。お店のおばさんは、

「じゃあ、大きそうなのを選んでいいよ。どれがいい？」

と、ぼくに選ばせてくれました。ぼくは飛び上がるほど嬉しくて、一番長いと思うものを指しました。10 おばさんから受け取るとき、

いつもよりずっと大きい声で

「ありがとうございます。」

と言えました。少しお兄さんになった感じがしました。そのチョコバナナは、いつものチョコバナナよりもずっとおいしかったです。

（言葉の森長文作成委員会 ©）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 夏休みに、私と弟の二人だけで、京都のおばあちゃんの家に行くことになりました。今年からお母さんが仕事を始めたので、子供だけで行くことになったのです。子供だけで新幹線に乗るのは初めてです。私は楽しみで仕方ないのに、お母さんは何だか不安そうです。

2 「ほんとに寝ちゃ駄目よ。大丈夫ね。」
お母さんが何度も私の顔をのぞきこんで言いました。私は、自信満々で、
「大丈夫だよ。心配いらないから。」
と言いました。お母さんは、でもまだ不安そうな顔で、
「頼んだからね。ハルが寝ちゃったら早めに起こしてね。」
と繰り返します。3 お母さんは本当に心配性なんだからと心の中で思いました。

新幹線に乗るときは、いつもシウマイ弁当を食べます。私はシウマイが大好きなので、このお弁当は好物です。売店で、シウマイ弁当とお菓子を買いました。4 私はチョコレート、ハルはグミです。それを抱えて新幹線に乗り込みました。

ドアのところでお母さんがまた心配そうな顔をしたので、私とハルは、元氣いっぱい手を振りました。切符を見ながら席を探して、座るとすぐにお弁当を食べる用意を始めます。

5 「いただきます。」
二人で手を合わせました。わくわくしながら蓋を開けると、シウマイが五つ並んでいます。まるで仲良く座っているみたいです。

「やっぱり新幹線に乗ったらシウマイ弁当だよね。」
私は、ハルに言いました。6 ハルも、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「ばくも大好き。」
と言いながら、一つ目のシウマイをパクリと口に入れました。私は、おいしいものは最後に味わって食べるのが好きです。お行儀が悪いと渋い顔をするお母さんもないので、私は五つ全部を取っておくことにしました。

7 私がとっておきのシウマイに箸をつけようとしたときです。ハルが、
「ああつ。」
と叫びました。驚いた私の足を、コロコロとシウマイが転がっていきます。ハルの落としたシウマイでした。それも、最後の一つです。ハルは今にも泣き出しそうな顔をしています。8 なんだかわいそうになり、私は自分のシウマイを一つ、ハルにあげました。もしお母さんが一緒なら、お母さんが自分のシウマイを分けていたと思います。ああ、早く食べてしまえばよかったなあと残念に思いました。9 それに、通路をはさんで隣に座っていたおばあさんが、
「さすがお姉ちゃん、偉いわね。」
と声をかけてくれました。恥ずかしかったけれど、嬉しかったです。ハルは、シウマイのお礼だと言って、自分のグミを半分分けてくれました。ハルもいいところがあるなと思いました。

0 本を読んだり、しりとりをしたり、なぞなぞを出し合ったりするうちに、いつの間にか京都に着きました。お母さんはまだ心配しているかなあ。京都に着いたことを早く伝えたいなと思いました。

(言葉の森長文作成委員会 ㊸)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34